特103
94

賞奇樓叢書
二期第四集

梶の葉

全

270
020

始

祇園花梶肖像

時103
94

梶子は西園林の茶店の女なり元より其わたりの人にや知らず其家集梶の葉を見れば幼きより歌をよめり十四になりける年の暮に歳暮戀と云ふことを「こひ〳〵てことしも仇に暮にけり涙の氷あすや解なん」又其秀逸として人の口にあるは夜霰を「雪ならば梢にとめてあすや見ん夜の霰の音にのみして」又立春の歌おのれはよしと思へり「のどけしな豊葦原のけさの春水の心も風の姿も」(以上近世畸人傳)

案ずるに梶は寶永を盛りに歴たる人なり寶永開板の風流優平家と(書名確かと記憶せず)云ふ草子に祇園に往きて歌をよむ女の茶店に憩はんと云ふ事などあり当時京洛の名物なりきと覺し巻首掲ぐる所の像は享保七年板俳偕繪文匣と云ふ書に見えたり案ずるに京傳の骨董集續編(未刊行)の豫定目録中に「祇園梶の肖像」と云ふ一項あり蓋し亦この像ならん

大正9.2.4 交換

梶の葉

男のすけるやまと歌は、女すらよめり、しかあれば、男女のなかをもやはらげ、猛きものゝふの心をもなぐさむるとこそ、貫之のぬしもかきためれ、かけまくも天の浮橋のもとにして、二柱のおほん神の、あなうましとみやびをかはし給ひしは、ながき妹脊のはじめとかや、久かたのあめにして、下照姫の言葉には、もろ神の心をさだめ、人の世には、采女が口ずさみにて、大君が心をなごめしとなん、かのならの葉のふるき跡をおもふに、あべの姫宮よりはじめて、ひなぶりにいたりては、賤のめ、あまの子の言葉をも漏さず、又古今集の序には、小野小町をなん其名きこふる數にえらめり、それよりおちつかた伊勢、相模、和泉式部、小式部の内侍、清、紫の二女、俊成卿女、宮内卿、丹後、さのみかきつゞけんもくだ〳〵しければもらしつ、このほかまさ木のかつらながく傳はれる、代々の勅撰にいれるおうなの歌は、濱の眞砂の數をしらぬたぐひなるべし、末の世といへども、大内の言葉の花、にほひいと深かゝらめどこすのひまもれいづることなければ、人しらぬことなんめり、そのやむごとなききはゝいふもさらなり、檜垣の女、白め、江口の君の言葉まで集にも入られ、世の口ずさみにもすなる、いま四の海浪しづかに、關のひがし戸ざゝぬ御世なれば、ものゝ道々いやさかりにして、都もひなも和歌のうら波、にこゝろをよせずといふことなんなかりける、まして九重にすめる人は、おのづからさゝ竹の大宮人の、みやびやかなる風情を仰きて、その名きこゆる人も多かり、こゝにちはやぶる祇の園のほとりに、茶店のいとなみをなせる梶といへる女あり、そのこゝろばへやはらかにしていやしからず、いとけなきより父母によく孝をなして、營みの遑なきすさびに、草子歌物語などにすきて、立やすらへる人の心ありげなるには、ふるき歌の心ばへをひそかに問聽きて、いつしかみそぢ一もじのなさけをしりて、花に月に口ずさめることになりぬるとぞ、かゝれば心のたくみにしたがひて、やさしきすがたもすくなからぬにや、ゆきかふ人の耳とゞ

むることゝなりにしかば、世のすき人はさらなり、さるはたうときかたにも、やさしきためしにきこえけるとぞ、これなん賤しき身といへども、和歌の德にて侍るならし、あるはあだ〳〵しきすきものは、たはれたる歌よみて、其返しを物せよと云騷ぐも多く、あるは心あるいなかうどは、その言の葉一つ二つ寫しもて、都のつとゝ云廣めけるほどに、むべなるかなあづまのはて、西の海のほとりまで、かうばしき名は流れずといふことなし、やつがれことし戌のきさらぎのはじめ、武藏野の霞を立出て、都の春を尋ねさまよふついでに、東山の花のもとに遊びて、かの茶店にやすらひ、よめる言の葉をきかまほしく、せちにいざなひければ、いな舟のいなびはてず、一つ二つ近きほどの歌なりとて書てみせつ、まことや傳へきゝしよりは心の泉深く、言葉の花匂ひまさりて、いとめづらかなるふしもまじれり、これようをり〳〵かの林のかげをわけて、旅衣なれゆくまゝに、草葉の露心置ぬさまになん、歌物語などせし事たび〳〵なりしが、文月の末、やがてあづまにくだることに成しかば、例の都のつとにみぬ人にもみせまほしう、和歌の浦の玉藻かき集めたるふみやある、みせてよと、しかまのあながちにせめければ、まめやかにも物せぬよしとかく云紛らはしけるほどに、酒などたうべける醉のまぎれ、玉手箱ひめおけるものを見出せしに、まろかれたる反古やうの物なりしかば、ひそかに袖にして歸りて見侍しに、かのかきおける玉藻なりしかば、深きほいとげぬと嬉しくて、とみに寫してかのがりに返しぬ、さりとて我獨りもていなんもをこがましければ、世のすき人にもみせまほしく、近きうきねの加茂の川水に短き筆をそめて、梓にいのちながうするものならし、

寶永三の秋文月それの日　武陵遊士　蛙鳴子

梶の葉　巻上

山家郭公

世に遠くすめばこそあれしのびねもわれにやゆるす山郭公

のこりの菊といふことを

なにゝかは比へてもみん枯はてゝ花なきころの白菊のはな

十四になりけるとし歳暮戀といふ事を人のよませ侍しければ

こひ〳〵て又一とせも暮にけり涙のこほりあすやとけなん

立春の心をよめる

のどけしなとよあし原のけさのはる風のすがたも水の心も

浦雪といふことを

ふく風もはらひははてじさ夜ふかみつもりの浦の松の白雪

雪の明かた人のゆきかひもほどちかく聞えければ

ゆく人のあかつき雪をふむ音もまくらにさゆる道のべの宿

ある人の許より「心ざし深くありげにいひかはし侍る女の、あふことはいと難かりけらし、ある日まかりて侍るに、ちいさやかなる人形の夫婦ゐますを手づから贈りて侍しかば、袖に手にしばしも放たず、人目だになき折ごとには取出て見侍るに、中々睦ましき妹脊のなからひもねたくさへ覺え、あはぬとのいとゞつれなくなりはべりぬ、されど手をも放たずうちまもり侍るとて、あふことはなほひとかたにつれなきをなど睦ましきかたみなるらん」といひおこせ侍し返しに

ひとかたに怨なはてそ逢ことは二世をかくる筐とを知れ

あふこと難き事のみいふめるを、なほ慕ふ心はつよく侍れば、あふことのはてしもあらぬ戀路にはもろき命やかぎりなるらん、と有し返し

あふ事にかゆる命をいざやまだしらぬ戀路になど限るらん

言葉はをり〳〵情ありげなれば、はかなくも身のなる果をしらでなど言葉の花の色にめづらん、と有し返し

あだにしも色になる身よかりそめの言葉の花にうつる心は

物くるおしうさへなりて、今はたゞあらぬ心となりにけり戀せざりにしもとの身ながら、と有し返し

もとの身と思ふはあらぬ心かは人はまことに戀せざるらむ

春戀といふことを人のよめといひければ

しのばれぬ心の色をそれとみよ雪まにもゆる野邊のわか草

依レ戀祈レ身といふことを

つれなさも思ひかへして更にまた命あらばと身を祈るかな

寄レ山戀

波は袖にこゆともたのむ玉の緒のあらばあふせの末の松山

月前忍レ昔戀といふ心を

諸共にみし世もあるを袖の上にあはれとひくるねやの月影

七夕によみて手向侍し

世のひとのあだし心にうつさばや一夜の星のたえぬ契りを

水郷の花といふ題にて

みる人もなぎさの花は思ひいづやたえて櫻といひし言の葉

黄葉を

ちしほとはまだしら露の薄もみぢしぐれをさそへ秋の山風

寄レ關戀

治れる御代も戀路はうかりけり人めの關のゆるしなければ

風の姿水の心も、いざしら波の寄邊定めぬうたかたのこぎゆく舟の梶枕、かは

さむことは思寄らねども、たゞ敷島の道しるべときけば、御心のたけもはかりしられず、花になく鶯水にすむ蛙まで、歌よまざらんはなしといへども、心をよする人まれなるに、かゝる女の心ざしこそありがたう侍る、詠じたかれし歌聞え侍れかしと尋ね行ければ、人めのさはりありて空しく歸り、よみてつかはしける「わとにのみ聞しよりなほ袖の浦のみるめにまさるわが涙かな、といひたこせ侍し返し

みるめうきはかなきあまの袖の浦にいざ白浪の立し計りを

都人の歌なりとて、吾妻にて見はべりし人に道のゆく手にふとまみえ、よみたける歌など見侍しほどにかく、聞しより見しことの葉の色深くにほひをそふる花の一もと、といひたこせたるかへしに

われこそはこの言の葉の花の香をあかず袂に深くうつさめ

海のほとりの春の曙といふことを

うつすともいかにたよばん水ぐきのゐじまが磯のはるの曙

寄レ螢戀

もえわたる澤の螢をうき人にみせばや身にもあまる思ひと

出雲國大社奉納の歌に月前待戀

歎きつゝいつ迄かくは月にのみ涙とはれむ夜はのさむしろ

人のもとへ傳ふべき文を失ひて侍りければ、文の主のもとへよみてつかはしける

ふみ迷ふ身こそ辛けれ日をへてもそこ知られぬ水莖の岡

夜時雨といふことを

色そはむあすの紅葉の幾しほをしらせてすぐるさよ時雨哉

かちの葉　巻中

夜叢といふことをよみ侍りけるに

雪ならば梢にとめてあすやみむよるの霞のたとにのみして

戀の歌を人のよませ侍しに

おもかげよいつのなさけに立ぬらむ人はあとなき風の浮雲

春たつこゝろを

あけわたる空ものどかにはる立と思へば霞む四方の山のは

夕落葉

くまとなる秋の木かげのうらみをも落葉にはるゝ夕暮の月

ある人の許より恨二一夜一戀といふことをしらざりきあすの契りをたのみきてけふぞ限りのいのちなりとは、と讀ておこせし返しに

けふのみになど限るらし玉の緒にあすの契をかけて頼まば

久しくあはざる人の許より誠に無限心中不平事、一宵清話又成レ空とは誰がいひけん「あはぬまはいかに怨の多かりき今宵は何を語りあかさん、と有し返しに

よしさらばくらべ喝たん逢ぬまの怨の數はいづれまさると

ある人のもとより忍にあまる戀の心を「君こふる袖しのうらの仇浪は涙ぞ汝のみちひなりける、と有しかへしに

涙にはみちひあらじをあだ浪の袖しの浦にさはぐばかりぞ

ある人の許より「よるべなきゆらの湊の捨小舟ゆくへを浪の梶をたえつゝ、と言おこせし返し

かひなしやゆらのみなとのあま小舟よるべ定めぬ人の心は

としのくれに

とゞめえぬ月日に關はなかりけり年ぞこえゆくあふ坂の山

限二一夜一戀

おもはずよあはぬ月日も吳竹の一夜のふしに限るべきとは

山家雪といふ心を

世にかよふ道こそなけれ谷かげや雪にぞ深き山のかくれ家

人のもとへ梅の花を折てつかはすとて

わが袖のにほひもゆかし君がため折つる梅の名殘と思へば

寄レ露戀を

おほかたのうき夕暮の露とみん秋のほかなる袖のなみだを

友とする人に誘なはれて、夕暮過るほどに道たど〳〵しけれど、女のあるじの歌よむ人となんいへるやどりに入て、その事かの事など語らひもてゆくにふるくよみ給ふる歌とて、數々をしるしてみせ給ふるに、遠く聞き遙におもへるは數にもたらず、となふれば其吟玉に聲あり、思へば其心錦にひかりあり、きくをたうとびみるをいやしくなすとは古人のそらごとにや、其歌のなかに寄露戀

といへるに

たれにかはかくとゆふべの袖の露ぬるゝもほすも心一つを

とあるに聊か倣ひて

袖の露ぬるゝもほすもしらぬ身にかゝるこゝろのみちしるべせよ

更によみ給ふる言の葉をと思ふ物から

夜をへてもきかで過めやほとゝぎすいかにをしめる初音なりとも

返し

春の花の匂をそへてほとゝぎす卯月もまたでもらす初音ぞ

三月三日　正信

ある人のよめる逢レ夢戀「しばしだにせめてさめずば春の夜の夢は短き花の面影」

同じ心を

あふ事ははかなき春のゆめぢかなやがてうつろふ花の面影

醒て後の心を「あふ事を夢なりけりと思ふにも醒しうつゝぞ苦しかりける」同

じ心を

契りあれば夢にもあふと思ふにぞたのみなりける覺し現の

名月に

くまもなき秋のこよひの月影に萩の下葉もさやけかりけり

待二郭公一

まつもうしきかぬもつらし郭公いかなる里に初音なくらん

寄レ月戀

なにゆへにかゝる涙と袖のうへに宿れる月を人やとがめん

もみぢを見侍りて

こゝにだにしぐれのそむる唐錦たつたの山は紅葉しぬらん

夕立

ゆふだちのはれて涼しき草むらは秋とやいはん露の月かげ

はじめの冬の心を

けさみれば秋のかたみの露きえて霜たきかふる冬は來に鳧

惜レ花

をしめ人春はいくかもあらし山名に誘はれて花もこそちれ

ある人のもとより逢難き心の歌よみてつかはしける「梶の葉にかきも傳へよ程遠き又こん秋の一夜なりとも、其返し

契りあらば星の手向の梶の葉にかゝれる露は秋やほさまし

ある人、世の中のよしあしともにあしがらの關のあなたの世捨人、都の花を事問はんもいと耻かしけれど、敷島の道いづれなさけを隔てねば「敷島の道に鳴なる都鳥音をのみ遠く尋ねきにけり、と有しかへし

いざ知らぬ道に迷ひて我ぞなくしるべとをなれ和歌の浦鶴

ある人のもとより、わのが世々になりてなほあかぬ別れをなげく身のうへを聞て「あだにふく風としらずもおみなへし靡きて今や露こぼすらん、といひたこせたる返し

秋とふく風ゆへうきを女郎花とはれていと〻露ぞこぼるゝ

卯月ばかり雨のふりける日、ある人の許より寄し雨戀といふ歌をよみてたこせける「戀せじな身を卯花の雨も今こぼれて袖に物ぞ悲しき、返し

戀せずばあはれもしらじとばかりの身を卯花の雨に喝ちて

ある人のもとより「梶の葉に書盡しても頼むかなあはれ一夜を星にたぐへて、と有し返し

世々たえぬ星の契りにたぐへてよ一夜ばかりの中は頼まじ

冬月といふことを

さ夜あらし萩のかれ葉の音ふけて霜にいろある月ぞ寒けき

立春

のどけしなけさあまの戸をいづる日の霞の衣春をかさねて

夕がほ

これなくばたれとひてみんしづが屋の烟いぶせき軒の夕顔

よるの鹿といふことをよめる

身にしればよそにはきかぬ小夜衣妻こふ鹿のなきあかす聲

月前擣衣

たがさとも秋の夜さむはしら露の月のひかりに衣うつらし

歳暮

暮にけり一夜計をへだてにて去年とや人のあすはいはまし

春歸らんといひて故郷へ行ける人のもとへ

春こんといひし言の葉たがへずばさかでや花も人をまつ覽

花の歌あまたよみけるに

けふの日もよしさは暮ねよし野山花をあるじに枕からなん

菊

露になほにほひもふかくさきそふや秋のいろなる庭の白菊

木葉ちる頃山のはの月を見侍りて

もみぢ葉のちるか時雨か一むらの雲やはかくす山のはの月

河原の夕すゞみを見侍りて

こゝに來てみたらし河の水上をおもへばすゞし波の夕かぜ

梶の葉　巻下

寄レ露戀

たれにかはかくとゆふべの袖の露ぬるゝもほすも心一つを

ある人の許より「あはれ我さだかにいつか夢ならで夢かとたどる逢事もがな、とありし返し

あひおもふ心にそれとみるならば夢のたゝちも現ならずや

いのる戀

祈るてふ心をせめてあはれともおもはゞ神も人にことはれ

ある人のもとより、二十日あまり三日の月を待ち奉るとてはしゐし侍り人の事のみ思續けいたう涙こぼして程なく月を袂に見て「露もかく思ひかけきや我袖にやどる月さへ待るべしとは、と云おこせたる返し

たが袖も秋のならひにたく露のたもひかけずば月も宿らじ

あづまより上りたる人の下るとて「忘れじな神のみそのゝ秋の月我は吾妻の果にすむとも、と有し返し

よひ〳〵は面影ながらまちいでむ吾妻のはての山の端の月

ある人の許より、人の心の花にめでゝ「春深くかすむ梢の花ならで人の心の色香をぞ思ふ　返し

言の葉の花のひかりをなほそへようたて心の色香なき身に

待二郭公一心を

よしや我まつ身としらば一聲を仄かにもらせ山ほとゝぎす

立秋

秋きぬとけさより袖に吹風の音はかはらで身にやしむらん

扇の模様に柳のもとに女の琴を彈じてゐるを見侍りて

いはでかく思ひ亂るゝ青柳の糸あひがたきしらべなるらん

寄レ蟲戀

木がくれて身を空蟬の露にのみぬれつゝ包む袖ぞはかなき

見不レ逢戀

君よいかにあはぬ歎によそながら見るかひもなき我戀の山

歳の暮にたやをいはひてよめる

老の波かずそふまゝにまた花の春にもちかきとしの暮かな

ある女のもとより「八重霞立隔てゝも梶の音そこと知らるゝ和歌の浦舟、とよみてたこせし返し

しるべせよ和歌の浦はにそことしも霞に迷ふあまの小舟を

雨中戀

一かたはをやみだにせよ手枕に涙もあめもいかにふるらん

加茂のみたらしに詣で侍りけるに、相知れる人の夕涼みに來れるよしを聞てよみて遣はしける

あかずみん人はよそにもみたらしの同じ流れの月と思へば

むかしを思ひ出る事侍りて

つらくのみすぎこしかたを忍べとやうき獨寢にたてる面影

述懷

さのみ身を思な詫そつらしとてうしとて世をば過ぬ物かは

夕時鳥

夕暮のあはれぞまさるほとゝぎす涙ほしあへぬ袖の五月雨

八月十五夜くもりければ

よし今宵くもらば曇れ世にたかき月の都の名にはかくれじ

なにはのかたをながめやりて

心なき身にさへおもふ春はたゞなにはわたりの明ぼのゝ空

寄レ露戀

大かたのうきゆふぐれの露とみんあきのほかなる袖の涙を

みちのくより上りたる人なりとて「君故に迷ひきにけり東路の忍ぶ心を哀れと

もみよ」返し

我にのみなにかは迷ふ吾妻路やまたことかたに人忍ぶらん

野寒草

みしやゆめのこる草葉に霜むすぶ手枕の野の秋のおもかげ

かへる雁

ゆく雁よはるな見すてそ山の名にかへる都の秋をおもはゞ

海邊秋夕

浦つたふ風ぞみにしむあまごろもたつしらなみの秋の夕暮

待レ雪

遠山につもるとみれど里はまだふらぬ雪げの空ぞつれなき

月照二叢露一

あくるかとみしは草葉の白露か庭もまがきも月ぞやどれる

しるべある庵にしばし身を隠せしに、をり〳〵友どちつれ〴〵を訪らふだにも

契りし人を忘れ難くて「思あるみ山の奥の苔の露かくても人を忘れやはする」

とある人の云おこせたる返し

うき中をいとひはてゝや山深み忘れんとてぞ身を隠すらむ

む月ばかりに雪のいたうふりたる日垣根の梅を詠めて

春もなほむもるゝ雪の梅がえは匂ひばかりに花ぞしらるゝ

隣梅といふことを

一えだもをりはやつさじさく花の主ようなる庭のむめがえ

待二郭公一

まちわびて夢もむすばぬ郭公幾夜あかしてはつねきかなん

扇の繪に芦に舟のかくれたる所をかきたるに歌よめと人のいひければ

かくて身も朽やはてなん難波江の芦間がくれのあまの捨舟

絶後戀

ちぎりしは昔なりけり思ひねの夢にはたえぬ人のおもかげ

恨戀

はふ葛のしたのうらみをしらねばや心とさはぐ人の秋かぜ

ある人のもとより「獨寢になれてぞ掃ふ塵ひぢや積りて床の山となりけり」返

し

せきあへぬ床は涙の淵なれやちりのみつのる思ひのみかは

初雁

玉づさを雁の翼にかけてこばおぼつかなさや秋はなからん

久戀

もらすなよ幾年したに湧かへる岩根の水のみくさがくれを

月のうたよみける

みる人のあはれと思ひつらしとも心のまゝに月やすむらん

木の葉の道をうづみたるに

雪ならばとひこし人の跡もみん木のはに埋む庭のかよひぢ

梅の花さかりなる比

春風にしられんもうしあづま屋のあまりに匂ふ軒の梅がえ

ある人の許より、今は唯思ひ絶えなんとよめりし人の古へもかくばかりこそと、ふる淡雪よりもまづ消えぬべくて「物思ふ心よさきに消果てゝつれなく殘る春の淡雪」　返し

物思ふ心もともにあは雪の身さへきゆるときかばたのまん

難面戀の心を

消ねたゞ人のつらさにかくしほる露の命にむかふうき身は

尋レ梅

風さそふ匂ひを道のしるべにてことゝふ里の梅をあるじに

雪のあした木々のこずゑを見侍りて

花かとよ見しは中〳〵白雪のかゝれる枝はむめもこと木も

明やすき月にはしゐし侍りて

まち出しまだ宵ながらね屋の戸をさゝぬにあくる短夜の月

寄レ鶏戀

後朝の其夜のまゝに鳥の名のかけはなるべきとは思ひきや

奇レ霧戀

たぐへやるおとも霰の玉ならばくだく心をそれとしられん

やよひのつごもりに

けふは又さらにもかすめ夕日かげいる山のはの春の別れに

ほとゝぎすを聞て

一聲は思ひなしかとながめやる雲のいづこぞ山ほとゝぎす

牡丹を見侍りて

われのみかあはれ胡蝶も花の色にうつす心のふかみ草かな

水鳥

みづとりの浮寐にさわぐ浪まくらむすびさだめぬ薄氷かな

早苗

賤のめがおりたつ小田の水鏡みるひまもなくとる早苗かな

藤の花を見にまうでゝ

たれとなく松の梢もとひこずはうらむらさきの藤の夕ばへ

逢不レ會戀

はかなくもたえぬ現にしたふかなみし夜のゆめの昔語りを

寄レ月祝

秋津洲やもとすゑなびく君か代はてる月弓の空にしるしも

寶永四年丁亥孟春良辰

平安書舍通情軒彫之

276
1020

大正四年八月廿八日印刷
大正四年八月廿一日發行

東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地
校訂兼發行者　宮崎璋藏

東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷人　金澤求也

東京市麹町區紀尾井町三番地
印刷所　元眞社

東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町五百九十一番地
發行所　珍書會
振替東京參〇四參參番

終